様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３３８０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６１６０２７

研究課題名（和文）ケアとしての保育環境の創出

研究課題名（英文）Creation of Childcare Environment When Providing Care

研究代表者
村上　誠（MURAKAMI, Makoto）

常葉大学・健康プロデュース学部・教授

研究者番号：３０３３１６０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：ケアされる側にある乳幼児はどのような保育空間を望んでいるのかを、アートワークショップを中心とした創作活動によってリサーチした。子どもたちは身近にあるものを素材とした遊びの中で自分の空間を創出し、その活動は自分たちの身体を拠りどころとしていた。つまり、各自の身体の尺度によって移動し、時に休息しながら空間を創り出し、それを拡張していくのであった。それらの結果から、①保育空間は変容を内在したものであるのが望ましく、②子どもの活動は、絶えず生成と消滅を繰り返す循環型であり、その循環は同じことの繰り返しではなく、緩やかな成長線を描くものであることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：By means of creative activities mainly consisting of art workshops, we researched what kind of childcare space is wanted by infants who are the subjects of our care. The children were found to creating their own space during their play with items that were near at hand as the materials and their own bodies as the tools of the activities. In other words, they moved in accordance with their body size, and created and expanded the space while taking breaks occasionally. As a result, it was revealed that (1) childcare space in which transformation resides is desirable and (2) children's activities have a circulatory nature that repeats generation and disappearance incessantly, drawing a gentle growth curve, rather than repeating the same activities.

研究分野：美術　幼児造形

キーワード：保育空間　保育環境　アクションリサーチ　アートワークショップ

１．研究開始当初の背景

子どもたちを取り巻く環境の重要さは増すばかりである。特に環境を自分から選ぶことのできない乳幼児の場合、さらに切実なものとなっている。幼児期の教育の特色は「環境による教育である」(2008 無藤隆）と言われているが、その環境という言葉そのものが、様々な意味を含みすぎてしまった。長く保育現場と関わり、特に乳幼児を対象にしたアートワークショップや幼稚園・保育園での実践の度に、大人が考えた過度に装飾的な保育環境に度々出会い、それらがワークショップの中で子どもたちが示す心身のあり様とは隔たったものであることを痛感していた。本当に子どもたちは、このような環境を望んでいるのだろうか。

塩野谷斉(2008)は、子どもの環境は人的、及び物的環境に分かれたまま研究が進められたと述べ、それらを統合した視点の必要性を提唱した。汐見稔幸（2004）は、そのような状況を乗り越えるためにも、子どもの生活環境の全体性の回復が必要であり、そのキーワードとして保育的〈雰囲気〉という言葉を度々使っている。〈雰囲気〉とはもともと、ボルノウ（1964）が『教育を支えるもの』の中で提示したものであり、トゥアン（1998）は「場にその場らしさを与えるのは、そこの雰囲気である」と述べる。乳幼児の環境を考察するには、微分化によって考察するのではなく、より広い視点と様々な要因を緩やかに包み込む保育的〈雰囲気〉が重要である。

このような先行研究もあって、保育環境を再考するためには良い時期になったと考えたが、ここでさらに重要な視点“ケア”を加えなければならないと考えた。乳幼児はケアされる立場にある。これまで、教育者としてよりもアーティストとして乳幼児の創作活動に関わってきたが、大きな反省点を抱えていた。それは、子どもたちに関わる姿勢、つまりテーマの設定から素材の選択までのすべてにおいて、ある環境の一方向的な提示であったかもしれない、ということであった。アートが享受する側の意志があって初めて成立するように、乳幼児の生活環境もまた、自分から発することのない彼らの声に耳を傾けないままに提示し続けることはできない。ケアされる側の思いをケアする側は傾聴しなければならない。

２．研究の目的

概念として定着してしまったかに見える“環境”それ自体を、享受する側からの視点によって再考する必要がある。ボルノウがすでに指摘しているように「人間の心性は、自分の内面から発生してくるというよりも、自分を取り巻くものと深い関係がある」のであり、ケアされる側には、そのことはさらに重要なこととなる。人間の環境を既成概念に捕らわれずに再検討し、アートの実践を通して人間、特にその始まりを生きる乳幼児の、あるべき保育環境を考察し、最終的には子どもたちが望む生活環境の一例を、明らかなフォルム（様態）として提示することを目的として設定した。

３．研究の方法

研究１）海外の保育環境の視察と〈空間〉意識の調査（文献研究、視察、及び実制作）

：“環境”について、教育・保育に限定せずに、領域を超えた文献を調査し、これまで行ってきた幼稚園や保育園での実践、美術館における教育普及活動の成果も、享受する側である乳幼児の立場から検証する。また、海外視察も行う。これまでアーティストとして海外招聘された折に、オーストラリア、フィンランド、ドイツの保育現場を見てきたが、今回はドイツの現状を丁寧に視察する。その検証の後、領域の異なる専門家と共に展覧会を企画し、その中で人間がこれまでどのような〈空間〉を創り出してきたのかを、視覚的作品による空間制作（インスタレーション）と徹底した討議によって考察する。

研究２）アートワークショップの実践（実践研究①）

：保育現場（幼稚園・保育園）と公立美術館でアートワークショップの実践を行い、それらの実践によるアクションリサーチによってデータ収集を行い、乳幼児がどのように自分たちの環境（生活空間）を捉え、またどのような環境を望んでいるのかを明らかにする。なお、ここでのデータ収集は、統計学的な手法ではなく、数字では計ることのできない現場の“雰囲気”を体感し、そこから考察するという方法をとる。実践の場は、愛知県内の２私立幼稚園（M 園、R 園)、愛知県内の２美術館（A 美術館、K 美術館）の他、静岡県内の２私立幼稚園（A 園、H 園)、３民間保育園（K 園、N 園、Y 園)、子ども施設（子育て支援施設 P、H こども館）などで行う。浜松市内の A 幼稚園と島田市内の Y 保育園及び子どもの施設 P では、単発的なワークショップではなく、各園・施設の年間保育計画の中にアートの活動を組み入れ、継続的に調査・研究を行う。

研究３）空間作りのワークショップ（実践研究②）

：実際の保育現場で子どもたちや保育者と一緒になって、子どもの生活空間を創作することを試みる。これは一方的に大人が子どもたちに与えるものではなく、それまでのアクションリサーチを背景として子どもたちの生活の中に入り込んで制作する。ここでの試みは、建築のような恒久的な空間ではなく、人間の関わりによって改変可能かつ持続可能なものとなり、ケアされる乳幼児がどのような保育環境を望んでいるのかという具体的な実例を示すものとなる予定である。実践の現場は、愛知県内の A 美術館、静岡県内の私立幼稚園 A 園、民間保育園 K 園と Y 園、子育て支援施設 P。

４．研究成果

（1）ドイツの保育環境の視察

2012 年 8 月～9 月、ドイツ、デュッセルドルフ市周辺の保育施設、小学校の他、福祉施設を視察。ラーティンゲン市立マティアス・クラウディウス幼稚園、ポール・マア小学校。グラフ・レッケ福祉財団運営の養護学校・保育園・幼稚園・老人施設。マールブルグ幼稚園そしてヴォルターアンセル障害者施設。

グラフ・レッケの施設では、保育関係の職員と保育環境及び保育とアートの関わりについて討議、保育環境が子どもたちの心身の発達に則した配慮がされていること、スヌーズレン等の新たな試み、アーティスト・イン・レジデンスの実施形態などについての詳細を学ぶ。また、カイザスヴェルトにあるマールブルグ幼稚園は、15 年前にも訪問したことがあったため、その間の変化、特に家庭での教育意識の変化とドイツの経済事情による保育形態の差異の詳細を知ることができた。

◎ヴォルターアンセルにおけるアートの活動

◎マールブルグ幼稚園のトイレ（左・1997 年、右・文字が並んだ 2012 年）

家庭の延長としての保育空間は同じであったが、公的援助に伴う子どもの受け入れ人数の拡大と保育の質の担保という点で苦慮しているのは我が国と同様であった。

この視察では、“環境”という概念があまりに茫洋として実態が掴みにくいことを認識させられ、個人研究としては保育の環境の中でも生活環境としての保育“空間”に絞るべきであると感じ、研究の方向を若干狭めることにした。

（2）“環境”から“空間”へ

文献研究と並行して、2013 年 3 月にギャラリーCAVE において展覧会『四つの域』を企画。美術、農学、歴史学、子ども学という 4 つの異なる領域で活動する表現者が、各専門分野から見た“空間”を考察し、それを視覚的に提示することを試みた。美術表現では視覚的空間の拡大と終息を平面絵画として示し、農学においては人間の営為である農業と自然との境界をインスタレーションとして作品化し、歴史学では歴史上に繰り返し登場した避域としての〈アジール〉を、人間の不可避の空間として言語表現で示した。また子ども学からは、ケアされる立場の幼い子どもが、ギャラリーの中に仮設された空間の中で遊び、その身体の動きが子ども自身の生活空間を創出していくことにつながる、という実例を示すことができた。

◎村上が制作した保育室の中で遊ぶ 2 歳児（「四つの域」展から）

ここでの成果は、2014 年 3 月に『四つの域、三つの対話』として、展覧会の記録写真と 4 名の空間についての対話をまとめ、出版した。その中で、夏目琢史（日本近世史）と村上は、歴史上の概念である〈アジール〉がケア、そして保育空間に通低するものであることを明らかにした。

（3）アートワークショップの実践

美術館や幼稚園・保育園でアートワークショップを実践し、それらのアクションリサーチによるデータ収集を行い、乳幼児がどのように自分たちの環境（生活空間）を捉え、またどのような環境を望んでいるのかを明らかにした。実践は、2011 年からスタートし、本科研費当該年度である 2012 年からの主なアートワークショップは以下の通り。2012 年 4 月「大人が作る新聞紙の空間」、7 月「大人が作る気持ちの良い空間」、8 月「親子で作る気持ちの良い空間」12 月と翌年 1 月「子どもが作る気持ちの良い空間」。なお、その他にも生活空間や遊びの場をテーマとした「動物といるところ」「こんな遊び場がほしい」といったテーマでのワークショップを保育現場と公立美術館で実施した。

◎新聞紙で作る空間（左・大人が作る、右・幼児が作る）

それらの実践から、子どもたちは新聞紙など身近にあるものを使って遊びながら、他者とのコミュニケーションをとり、さらに自分

の空間を拡張していくことが示された。その拡張にあたっては、“移動”と“休息”という身体の動きが大きな要因となっていることが確認された。空間（場）が作られる過程は、順序だって同じリズムで進むのではなく、子どもたちが自らの身体を拠りどころとして、それぞれの身体の尺度によって移動し、時に休息しながら空間を獲得していくことがわかった。またそのような作業は、全体の構成を意識して計画的になされたものではないものの、自らの内的必然性と身体性によって作られたものの場合には、子どもたちの興味と制作意欲は長く維持されていくことも確認できた。そこでの成果は、勤務校の研究紀要、及び日本保育学会で公表した。

（4）“空間”をテーマにしたアートワークショップの実践

アートワークショップの最終段階は、様々な素材を用いた子どもたち自身による空間作りである。2013 年 4 月から実践した、2 歳児のダンボール箱とダンボール板による「空間づくり」に始まり、幼児が布を用いた「遊び場作り」、保育室の中に別の小さな保育室を作る「おうちのなかの〈おうち〉」、幼児がカメラを使って、自分たちの環境（生活空間）を撮影する「写真遊び」も実践した。

◎「おうちのなかの〈おうち〉（左・3 歳児、右・2、3 歳児）

◎布の空間を作る 4、5 歳児（左右とも）

「おうちのなかの〈おうち〉」では、子どもたちが空間の大きさや質感といったものを自分の身体で測定し、それを基盤にして拡張と収縮を繰り返していた。それまでのアートワークショップと同様に、このワークショップにおいても、遊びは発生から一定のピークに至り、それが徐々に収束に向かい、やがて消えていった。

以上の実践と考察を通して得られた成果のポイントは、①保育空間は変容を内在したものであることが望ましいこと、②子どもの活動は終着点といえるようなものはなく、絶えず循環し成長するものであること、以上 2 点であった。子どもの創る空間は、それが生きているからこそエネルギーに満ちている。しかし、生きているものはやがて姿を変えていき、最終的には消えてしまう。子どもの遊びは、いつでも変容を内在させたものなのである。ここでの成果は、勤務校の研究紀要に掲載し、日本保育学会で発表、また美術館教育のシンポジウムでも報告した。

（5）今後の研究の方向性

本研究は、当初の予想を超えた領域に拡がっていき、個人研究としての許容範囲に収まらなくなってしまった。そのため、本研究終了後である 2015 年は科研費申請を止め、実践が不充分であったカメラを使ったワークショップと、様々な素材をミックスした空間作りの実践を続けて行う予定である。これまで実践をさせていただいた幼稚園・保育園とは深い信頼関係が出来上がったこともあり、それらの実践は快く受け入れられ、すでに活動を始めている。

本研究のスタートの時点でテーマを“環境”から“保育空間”へ絞り込んだが、さらに“空間”という抽象的なものではなく、子どもたちの活動そのものに焦点をあてた研究を、これからスタートさせる。具体的には本研究で得られた成果①と②を基に、子どもたちのアートの活動を「生きる営み」として捉え、活動の成果（作品）ではなく、生きて活動することそのものを全面的に支援するための活動と考察を展開しなければならないと考えている。それは循環し成長していく子どもたちの「生の営み」に寄り添うものであり、それを【循環成長型アートプログラム】と名づけ、すでに保育現場との共同による 3 ヵ年計画『Y（保育園名）・アートプログラム』を、2015 年 4 月からスタートさせた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①村上誠、幼児の生活空間創出のためのアクションリサーチⅣ：仮設の空間での保育実践、査読無、常葉大学健康プロデュース学部雑誌第 9 巻第 1 号、2015、167-173 頁

②村上誠、幼児の生活空間創出のためのアクションリサーチⅢ：新聞紙を素材とした実践から（2）、査読無、常葉大学健康プロデュース学部雑誌第 8 巻第 1 号、2014、103-108 頁

③村上誠、幼児の生活空間創出のためのアクションリサーチⅡ：新聞紙を素材とした実践から（1）、査読無、名古屋柳城短期大学研究紀要 34 号、2012、181-187 頁

〔学会発表〕（計 3 件）

①村上誠、幼児の生活空間創出のためのアクションリサーチ、日本保育学会第 68 回大会、2015.5.9、椙山女学園大学

②村上誠、幼児を対象にした鑑賞とアートワークショップ、シンポジウム：地域と美術館をつなぐ～美術を通した学びから～、愛

知県鑑賞教育普及事業実行委員会主催、2014.1.12、愛知県美術館
http://jhsart.net/wp-content/uploads/2014/01/f378f4e24b29e2248ffef99823532c85.pdf

③村上誠、南陽慶子、新聞紙を素材とした遊びにみる子どもの表現と身体性：造形行為における場の創出をめぐって、日本保育学会第66回大会、2013.5.11、中村学園大学

〔図書〕（計１件）

①村上誠、ギャラリーCAVE発行、『四つの域・三つの対話』、2014.3.1、A4判32頁
http://www.gallery-cave.com/

６．研究組織

(1)研究代表者
村上　誠（MURAKAMI,Makoto）
常葉大学・健康プロデュース学部・教授
研究者番号：30331606

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし